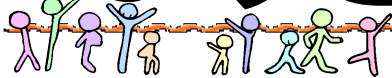


ぼうさい



発行 平成27年1月25日 第11号
NPO セーフティネット ぼうさい
〒948-0003
十日町市本町 6-3
連絡先(代表 尾身誠司)
電話 025-752-7353
FAX 025-750-3670

E-mail tbk119@jeans.ocn.ne.jp

震災体験から得た防災訓練の進化

代表 尾身 誠司

新潟県中越地震から十一年になろうとしている今、何が問われているのでしょうか。

平成七年に起こった阪神・淡路大震災を「対岸の火事」と思っていたのではないでしょうか。

それも仕方ないことだと思えます。なぜなら、人間痛い目をして初めて分かるからです。その後次々と起こる地震、東日本大震災の発生、日本中目が覚めました。

十日町市もご多分にもれず、自主防災組織の組織率は大幅にアップ、各地で訓練が行われるようになりました。

我々NPOもその一助を担うべく活動を実施しています。今年度も三四回余り延べ参加は

一五〇〇人ほどです。

防災訓練・講話について考えてみました。

1 防災についての知識を学ぶ

ア 大学等の講師による高度知識

イ 被災体験からの話

被災時の体験は、次々と起こる災害で身近なものに興味を示す。

ウ 一般市民レベルで大切な自分・(家族)の命は自分で守る。地域は地域で守る。

地域の絆は大切、安否確認、消火訓練、救急訓練、避難訓練、避難所の運営など共助としての活動のスキルアップ、これが基本です。

その指導者として我々NPOの活動が期待されています。

2 防災士に何を求める

県下いくつかの市で公費により防災士を育成しています。そ

の後どのようなことを防災士に期待しているのか。自主防災会に防災士を育成、配置すれば何とかなると期待しているようですが、防災士個人の力は微力です。

NPOのようなチームとして活動の場をつくり、達成感のある活動ができる様にすることが必要です。

新潟県自主防災組織コーディネーター登録者は一五〇人かいらいますが、県支部会員一〇〇人中登録者は二〇人ほど、個人情報のため各市町村には通知されているようです。十日町市はNPOメンバー二七人中防災士一三名全員コーディネーターです。自主防災組織の訓練等委託事業を受託し活動しています。

これからも地域に密着した訓練にしたいと考えています。

「妻有地域防災ネットワーク協議会」の設立

遠藤 昭一

新潟・福井豪雨(七・一七水害)から始まり、同年十月二十三日、新潟県中越地震と災害が続いた。

大勢のボランティアの方々に参加いただくようになり、効率的なボランティアセンターの必要性が叫ばれ、少しずつではあるが運営が出来るようになってきた。

平成十九年七月十六日、今度には新潟県中越沖地震が発生し、その経験が少しは効果を發揮できたと思う。しかし、災害は容赦無しにやってくる。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生し、翌十二日には長野県境地震が発生した。

またゲリラ豪雨は同年七月二十九日に十日町に重大な被害が発生した。

キナーレにボランティアセンターが開設され、その折に青年会議所・十日町社会福祉協議会・NPOセーフティネットぼうさいの協力が形を作り始めた。

この経緯を踏まえて、十日町青年会議所の提案で「妻有地域防災ネットワーク」の確立をしたいと平成二十六年三月二十一日、第一回の会合を開催した。

以来会議を重ね新潟県中越地震から一〇年目の十月二十三日、「公益社団法人十日町青年会議所」・「十日町社会福祉協議会」・「NPOセーフティネットぼうさい」の三者からなる「妻有地域防災ネットワーク協議会」の締結式が行われ、正式に発足した。

この協議会は、度重なる災害を受けた十日町市からこの体験を生かした防災対策を発信する。三者でそれぞれのネットワークを駆使し、平常時は減災対策、非常時にはボランティアセンター設置の協力体制を確立するものです。

そのため年一回は協議会で防災イベント等を開催し、災害を忘れないための防災意識向上を図るものです。

世界的に、また地球環境の変化などと言われているが、いずれにしても自然災害は何時襲ってくるか分からない。また、どのような災害になるかもわからない。しかし最大限の防災努力は必要だろう。少しでも減災すること。また災害に柔軟に対応することが必要と思う。

我々「NPOセーフティネットぼうさい」も出来るだけの情報を

を集め、この地に起こりうる自然災害の予測を察知し、防災・減災の対応を呼び掛けて行く。そして万一発生したら機動力のある「公益社団法人十日町青年会議所」・「十日町社会福祉協議会」の方々と協力しながら、避難所の運営やボランティアセンターの活動支援等十分に訓練を重ねて対応出来るように心掛けて行きたいと思う。



協議会締結式

三条防災ステーション視察研修

根津 良夫

平成二十六年八月十日（日）
会員九名で今年五月にオープンした三条防災ステーションと大河津分水資料館の視察研修に行ってきました。

午前中は平成十六年七月十三日と二十三年七月二十九日に発生し多大な水害の被害を受けた三条市の防災資料館の視察をしてきました。

そこには当時の被災写真や地図上での全体被害状況が記されており、あらためてそのいたましさに驚かせられました。

また、自動車の浸水時での水圧体験など普段経験できないことを体験し豪雨災害の悲惨さを実感しました。

午後からは大河津分水資料館でこの壮大な堰が出来るま

での歩みや、堰を完成させるために多くの犠牲者や、多額の資金を投入して完成させたことです。このことにより、今では広大な越後平野を産み出し豊かな実りをもたらしてきました。

しかしながらここに至るまでに洪水により多くの尊い人命、家屋、田畑を流し去ったため、多くの人々が江戸時代から請願し続け、明治九年から、一〇〇年あまりかけてようやく完成されたとのこと。実際に堰の上を散策し、その規模の大きさと高さには感激しました。

しかしながら、我々の地域では水害ということに対して甘く考えていたかもしれませぬ。

最後にお盆前の何かと忙しい時に視察研修に参加された方々に感謝致します。



三条防災ステーション、大河津分水資料館視察研修

東北ボランティア活動について

尾身 博司

東北大震災から三年が経過しました。時の流れは速いものですが被災地の復興は依然先の見えないままです。

平成二十四年宮古に植樹ボランティア活動をしたNPOぼうさいは、今年は十一月八〜九日に宮城県岩沼市に行つて来ました。

私はNPOのボランティア活動として初めて参加させて頂きました。今年は「どんぐり拾い」をして来ました。今回参加した団体名は「瓦礫を活かす森の長城プロジェクト」で横浜国立大学の宮脇昭名誉教授が理事長を務める団体です。

活動内容は防潮堤を作り直す為にコンクリートでなく森にして防潮堤を作る活動をしています。

森の防潮堤の構想は植樹地に被災地へ出た自然木やコンクリートガラ・レンガなどと土を混ぜ、掘った穴に埋めて土盛りを作り植樹します。

植樹する苗はその土地本来の樹木（シイ・タブ・カシ）など常緑広葉樹を植えます。植樹する苗もどんぐりを拾い、二年かけて育てたポット苗を植えます。どんぐりもその土地に合う種でないと育たないそうです。その苗を植樹し二〇〜三〇年歳月を掛けて緑の防潮堤を作っていきます。

人や家屋などを守る防潮堤作りが、NPOの役割として自信を持って取組める活動で意に合っているとしました。時間が有れば自分が植樹した苗木がどれだけ成長したか見に行くのも良いかもしれませんね。参加された方は解りますが「どん

ぐり」も奥が深い。その一言です。

最後に来年の植樹祭が決まっています。ぜひ全員で参加したいですね。

一泊二日でしたが貴重な体験が出来て楽しい活動でした。



東北ボランティア活動

防災風呂敷の作成について

根津 征吉

手足の骨折や捻挫などの際の固定方法、保温のやり方、及び毛布を使った応急担架の作り方を風呂敷にプリントし、それを私たちは「防災風呂敷」と名付け、市内各戸に一枚ずつお届けさせていたきたいと考えました。

各戸においては防災風呂敷と不用になった風呂敷数枚を一緒にナイロン袋などに入れて、例えば玄関の靴入れなどに入れておいてほしいのです。

風呂敷は二つ折りにすることにより簡単に三角巾を作れます。三角巾は頭部から足部までの様々の負傷部位を固定することができ極めて便利で消防署の救急隊も使用しています。事故や地震などの災害によ

り負傷者が出たときに、靴入れからナイロン袋に入った風呂敷を持ち出して負傷部位などを固定していただきたいと考えました。

この防災風呂敷は救急講習の教材として作成しました。突然の事故により発生する負傷者に気が動転して受講とおりの救急処置ができない場合も考えられます。そのような時に防災風呂敷のプリントを見ればすぐにできます。また受講してくださった方が防災風呂敷を見ながら、ご家族の皆さんに教えてあげることが出来ます。

心肺停止や大出血などのように1秒を争って救急処置をやらないと命が危ない場合がありますが、防災風呂敷にプリントしてある負傷等はそれとは違い落ち着いて確実に処置できる状態です。言葉をかけて勇気づけ

ながら救急隊の到着を待っても大丈夫のことが多いと思われると思います。

それではなぜそのような急を要さない負傷をプリントしたかと申しますと、地震など広域的に発生する災害に備えたものです。負傷者が多数発生するため救急隊がすぐに来てくれるとはかぎりません。そのような時に負傷者を処置しないままにするとショック状態に陥ります。

ショックとは医学的には、何らかの原因により血圧が下がり、全身の血液のめぐりが急に悪くなり、酸素や老廃物の運搬が円滑に行われなくなった結果引き起こされる様々な全身症状をいいます。ショックを引き起こした場合には骨折といえども、直ちに医師の診療を受けなければ生命にかかわることにもな

りかねないのです。

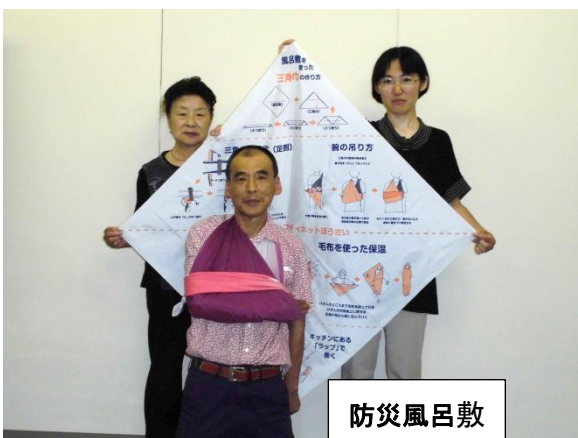
このようなことから、平常時の事故はもちろんですが、特に地震など広域的に発生する災害に備えることを主眼に防災風呂敷を作成したものです。

ショックを防ぐためには痛みの軽減、適切な体位、適切な保温そして安静が極めて大切です。

講習は町内単位などで市防災安全課に申し込みをしてください。私も会場に出かけて開催します。

費用はかかりません。どうぞ申し込みをさせていただきます。

防災風呂敷は市役所本町分行舎「ひとサポ」でも販売しております。



防災風呂敷

防災訓練指導総括について

藤 木 忠 雄

本年も、十日町市との業務委託として自主防災組織の訓練指導等を行ったので、その活動を総括します。

今年の防災訓練指導の特徴としては、通常の自主防災組織の訓練指導の他に、各地のイベン

トに参加してAED取扱いパフォーマンスを行ったこと、ひとサポ人材育成事業とコラボレーションしサバイバルクッキングに取り組んだことです。

自主防災組織の訓練指導は四月二十七日をスタートに十二月七日までの七か月半、また六月からは毎週のように指導を行った。その中でも各会場に「十日町防災ふるしき」を展示してプリントされた絵を見ながら、応急手当のやり方を指導したり、自宅にある風呂敷とセツトにして下駄箱等に入れておくなど、ふるしきの普及PRを行った。

また例年のように天候の影響や地域の温度差により参加者の多い少ないがあったが、どこでも指導者のユーモアを交えた指導に真剣に取り組み、時には悪乗りをしてケガに繋がりが

ねない為、たしなめる場面もあった。

水辺の公園「山のこったく祭」などの地域イベントに参加して、AED取扱いパフォーマンスを披露した。内容としては夫、妻、子供、祖父、区長、近所の人、消防署通信員の配役を決める。

夕食後の一家だんらん時に突然じいちゃん倒れて慌てる家族、その後、妻が消防署に通報し、その対応に合わせて夫が心肺蘇生を始める。子供がAEDを取りに行き、区長や近所の人も騒ぎを聞き駆けつける。

AEDが届き電気ショックや心肺蘇生を継続し全員の協力が功を奏し、じいちゃんが一命を取りとめる。以上の場面設定を行い、妻役は仮装したり、方言丸出しのセリフで喋り、面白おかしく寸劇をして安心してAED

Dが取り扱えることのPRに努めた。パフォーマンスも配役八人用と四人用の二通りを設定し、各イベントに合わせて行った。

平成二十六年も手を変え品を変えて防災訓練指導に努めて来ましたが、昨年に比べて自主防災訓練が減少したことです。事業委員会としては、さらなるPRを行い減少に歯止めを掛けなければならないと思っています。



AEDパフォーマンス



編集後記

二十六年度も残り数カ月を切りました。三年目となった市の委託業務は、訓練数は減少しましたが、内容は、年を重ねるごとに向上しています。AEDの寸劇も好評をいただきました。「防災風呂敷」も、ようやく形に

なり、自主防災会の皆様からご注文を頂き、有難いです。これから、一番身近な防災力として、活動を続けてゆきたいと思っています。(正)

阪神・淡路大震災から二〇年当時の被災体験者が五〇パーセントを切った。風化が心配されているが、痛ましい体験した人には無縁の言葉であり、一生忘れることはできない。

中越大震災から一〇年、十日町市から「防災ネット協議会」が全国に発信された。新たな防災対策として注目をされることでしょう。(せ)



(福原さくらさん)